都市文化研究　Studies in Urban Cultures
Vol. 14，120−131頁，2012

◇翻　訳◇

橋をかける司教

—— 中世ピレネーの聖性と権力 ——

ジェフリィ・A・バウマン
（村上司樹 訳）

◆要　旨

『聖エルメンガウドゥス伝』によれば，ウルジェイ司教アルマンゴルは架橋工事の途中で川に落ちて死んだ。しかしわずか半世紀後には，聖人として揺るぎない地位を確立する。都市と農村の別を問わず，広く司教区全域で崇敬を集めたのは，物的な橋をかけると同時に霊的な橋で信徒たちの魂を守ったからであった。まず橋は住民に安全をもたらし，かつ巡礼や商人の往来を活発にする。それゆえ 11 世紀ピレネー地方における都市化の進行を後押しした。また橋の建設は，重要な統治行為であると同時に，キリスト教的な信心行為でもあった。司教と橋の関係は深い。さらにアルマンゴルの場合，水に関わる奇蹟を通して，地域住民の自然征服を助けたことが熱心な崇敬につながった。証書と聖人伝という 2 種類の史料群を駆使しながら，都市成長の第一期ともいうべき 11 世紀前半の司教が果たした多面的役割を考察する。

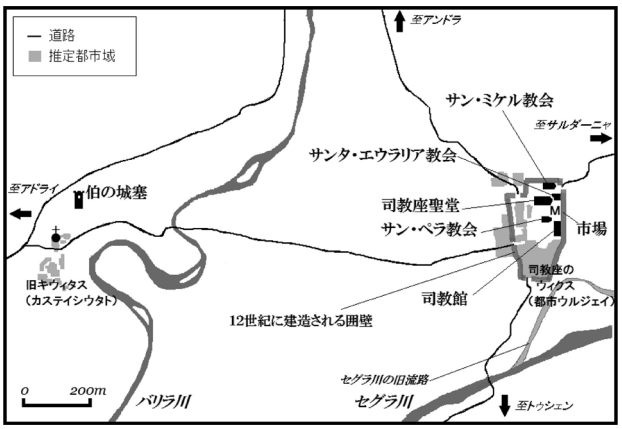
キーワード：司教，橋，都市，聖人，11 世紀，スペイン，カタルーニャ，ウルジェイ

（2011 年 9 月 13 日論文受理，2011 年 11 月 4 日採録決定 『都市文化研究』編集委員会）

訳者解題

以下に訳出したのは Jeffrey A. Bowman, The Bishop Builds a Bridge: Sanctity and Power in the Medieval Pyrenees, *The Catholic Historical Review* 88-1 (2002), pp. 1-16 である。ジェフリィ・アラン・バウマン Jeffrey Alan Bowman 博士は，1966 年生まれ。米国イェール Yale 大学で，トマス・ヘッド Thomas Head，ポール・フリードマン Paul Freedman，ジョン・ボズウェル John Boswell の薫陶を受け，10-11 世紀カタルーニャ Catalunya（現スペイン北東地方）の紛争研究で博士の学位を取得した。1997 年からケニヨン Kenyon 大学で教鞭をとり，現在は教授として歴史学を担当する。初期および盛期中世の南西ヨーロッパ（イベリアおよび南フランスの一部）を対象に，法制史・教会史の両分野を接合した研究を進めている。

法制史研究の代表は，2004 年に出版された主著『境界標の移転。紀元千年前後のカタルーニャにおける財産・証拠・紛争[1)]』であろう。フランス学界のフィリップ・ビュック Philippe Buc をして紛争研究の「もっともすぐれた分析にして歓迎すべき成果」と称賛せしめ，出版翌年にはアメリカ歴史学協会 American Historical Association のプレミオ・デル・レイ賞 Premio del Rey Prize に選ばれた[2)]。教会史研究としては，10 世紀前半コルドバ Cordoba で処刑された聖ペラギウス Pelagius 殉教録英訳とその分析があり，半島北部の聖職者とモサラベ聖職者あるいはムスリムの詩人の間にあった一定の共通認識を明らかにしている[3)]。



図版 1　都市ウルジェイ

J. Bolòs, V. Hurtado, *Atles del Comtat d'Urgell*, Barcelona 2006, p. 79 をもとに作成。

図版 2　司教アルマンゴル時代のカタルーニャ（伯領と司教区）

本稿の特徴もまた，他の地域とは比較を絶するほど豊富なカタルーニャの証書史料と，逆にカタルーニャでは極めて稀な聖人伝史料を併用した 11 世紀司教論という点にある。それは上述の 2 大テーマにも重なるが，主に証書を手がかりとした前半部では司教・伯の聖俗パートナーシップにもとづく統治のあり方と，そのような理念の下で司教が果たした幅広い役割が考察対象になっている。法廷戦術を駆使した教会所領の防衛と並んで，一種の経済政策が司教の聖性を高めたとする論の展開に注目したい。橋の建設も司教に期待された役割のひとつであった。橋がもつ物的な意味と霊的な意味の両面から司教アルマンゴル Ermengol の聖性に迫った後半部は，本論文の真骨頂をなしている。交通インフラを整備する公共事業主（にして施工者）であったアルマンゴルは，水を通して人間社会と自然の関係を調整する仲介者でもあった。こうした考察には聖人伝研究の豊富な知見がうかがわれる[4)]。

末筆ながらバウマン博士は，本論文の邦訳を喜ばれるとともに，訳者の細かな質問にも E メールで迅速かつ丁寧に回答してくださった。あらためて感謝するとともに，今後ますますの活躍を祈念してやまない。

注

1．［訳注］J. A. Bowman, *Shifting Landmarks: Property, Proof, and Dispute in Catalonia around the Year 1000*, Ithaca & London, 2004. 同じカタルーニャでも都市バルセロナ Barcelona を中心とした地中海沿岸に比べ，中世ピレネーは日本語読者にとって未だ馴染みの薄い地域であると思われる。そこで本訳稿では，英語原文にない解説を訳注として挿入した。図版もすべて訳者が追加したものである。

2．［訳注］ビュックの書評は以下の掲載誌を参照。*The Journal of interdisciplinary history*, 37-1(2006), pp. 122-124. プレミオ・デル・レイは，13 世紀バレンシア史研究で知られ，アメリカ中世スペイン史学会 American Academy of Research Historians of Medieval Spain の初代議長も務めたロバート・イグネイティアス・バーンズ Robert Ignatius Burns（1921-2008 年）が出資して 1990 年に創設された学術賞。6-15 世紀スペインの歴史・文化に関する研究のうち，2 年ごとにもっとも優秀と認められた業績に贈られる。2010 年までの 11 人の受賞者については，以下のホームページを参照。http://www.historians.org/prizes/awarded/PremioWinner.htm

3．［訳注］Bowman, The Martyrdom of Saint Pelagius, translation and introduction, in T. Head(ed.), *Medieval Hagiography: A Sourcebook*, New York 2000, pp. 227-235; Beauty and Passion in Tenth-Century Córdoba, in M. Kuefler(ed.), *The Boswell Thesis: Essays for the Twenty-Fifth Anniversary of John Boswell's Christianity, Social Tolerance, and Homosexuality*, Chicago 2006, pp. 236-253.

4．［訳注］バウマン博士が現在手がける 2 つの研究プロジェクトも，前述の 2 大テーマに沿ったものである。すなわち法制史面では裁判権の行使に注目して 9-12 世紀ヨーロッパの女性（したがって大半は伯妃や副伯妃）を考察し，教会史の領域では初期中世スペインにおける聖人崇敬と共同体，とりわけ儀礼と政治の相互浸透関係を分析しているという。特に後者については，殉教聖人が流した血とタラゴナ Tarragona やメリダ Merida のような後期古代都市の変容，あるいは司教聖人による市場開設や造幣活動と 11 世紀イベリア固有の為政者的聖性など，都市的問題との関連でアプローチしている点が興味深い。

本文

1035 年 11 月，ウルジェイ Urgell 司教アルマンゴルの在職期間は，あっけない幕切れを迎えた[1)]。四半世紀にわたってピレネー地方カタルーニャ圏 the Catalan Pyrenees の同司教区を教導した末の，事故死である。この日アルマンゴルは，セグラ Segre 川に臨む丘陵地バル Bar を訪れていた。高地ピレネー the high Pyrenees に水源をもち，ウルジェイ司教区を南北に縦断するこの急流に橋をかけるためである。聖人伝によれば，架橋工事を指図するのではなく，みずから建設に従事したという[2)]。現代なら，さしずめ直接参加型の政治家とでもいおうか。実をいえば同時代にも，このアルマンゴルを指して「建設者司教 episcopus athleticus」と表現した例が，少なくとも 1 件は確認できる。こうして司教が作業に当たっていたまさにそのとき，突如として橋が崩れ落ちたのである。アルマンゴルは流れに呑まれ，川下の岩に叩きつけられた頭蓋骨は粉々に砕け散った。

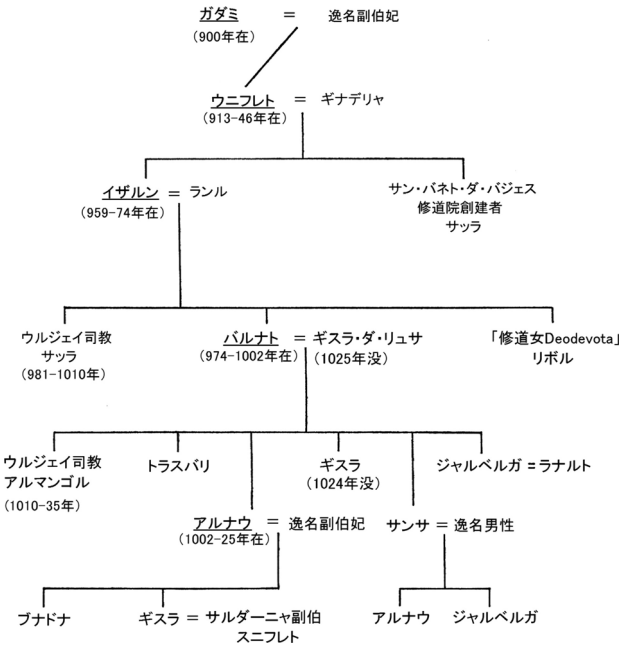
紀元千年ごろの司教像を考えるうえで，アルマンゴルの生涯ほど豊かな情報源はない。精力的で長命を保った為政者であるばかりか，聖人伝と証書という 2 種類の史料にも恵まれているからである。11 世紀カタルーニャ社会は，ヨーロッパでも抜群に高いリテラシーを備えていた。司教アルマンゴル期の贈与文書，売却文書，遺言状，財産をめぐる裁判記録の数は，実に 160 を越える[3]。11 世紀の司教がどのように司教区を治め，またどれほど信徒のために心を砕いたか，それが分かるのもこうした史料状況のおかげではあろう。

さらに聖人伝が別の視座を与えてくれる。すなわち生前から認められていたアルマンゴルの聖性は，その死によって揺るぎないものとなったが，早くも事故の翌年「尊者 venerandus」として回想されている[4]。バルの事故から数年後には「聖人 sanctus」と称されるに至った。遅くとも 1092 年までにはアルマンゴルを記念した祭壇が設けられ，以後，数世紀にわたって信徒を集めることになる[5]。ところで，おそらくはブレイ Borrell という聖堂参事会員が執筆したアルマンゴル伝は，大部な書物でもなければ，印象に残るほど独創的な作品でもない。しいていうなら「ポンティフェクス pontifex（司教）」の語戯を限りなく追求した点に，若干の文学的功績を認めてもよいという程度である。しかしいずれにせよ，司教アルマンゴルの統治・奇蹟・移葬について，人びとの反応とともに知ることができるのはこの聖人伝のおかげである。要するにアルマンゴルが思い描き，成し遂げ，またときに落胆した事象は，2 種類のまるで異質な史料群から明らかになるのだが，アルマンゴルの人物像に迫るための両史料群はそれぞれ固有の作法にもとづいて書かれており，いずれも一長一短あるといわざるをえない。したがって，ときには聖人伝史料 hagiography，またときには証書史料 diploma と，別々の史料群に司教イメージの源泉を求めることになる。両者は照応関係にあり，論点によって一方が他方を裏付け，互いに不足する情報を補い合う。たとえば聖人伝は，アルマンゴルの親族やカタルーニャおよびセプティマニア Septimania に広がる聖俗貴顕のネットワークについて，ほとんど何も教えてくれない。逆に証書はこうした人間関係を幅広く伝えるものの，聴衆の心を捉えて離さなかったアルマンゴルの説教については，頑なに沈黙を守りつづけている。

なおアルマンゴルは，その最期においても特徴的である。聖人伝が語るバルの橋の悲劇は，単なる叙述上の潤色にとどまらない。それは 11 世紀司教の役割を正当に理解するうえで，手がかりとなる事件である。しかし興味深いその死について考察する前に，アルマンゴルが一体いかなる点で特殊な存在であったのか，逆にいえば他のカタルーニャ司教とはどのような共通点があるのか，まずはこの点から確認しておきたい。

司教と伯

クンフレン Conflent 副伯の息子として，アルマンゴルはこの地域有数の家系に生を受けた[6]。クンフレン副伯家とウルジェイ司教座ならびに聖堂参事会の関係は，ときに険悪となることはあっても，長期的には親密さを保っていた。やがて 996 年に，アルマンゴルは「大司祭 archilevita」としてウルジェイの史料に登場する。1002 年の史料では，大助祭の肩書きを帯びている[7]。アルマンゴルがしばしばその取引に立ち会った司教サッラ Sal.la は，981 年から同職に就いていた。アルマンゴルがウルジェイ司教になるための手筈（てはず）は，このサッラが 1003 年までにととのえたものである。サッラはウルジェイ伯と約定を交わし，当のアルマンゴルも下署したこの文書において，司教職の授与および反対者がいれば戦いも辞さないことを同伯に約束させた。代価として，伯はアルマンゴルの叙任時と在職初年のあいだ，一定の金を受け取ることになっていた。さらには新司教アルマンゴルが，聖遺物を納めた祭壇で伯に誠実誓約を立てることまで取り決めている[8]。いよいよ 1010 年にサッラが死ぬと，周到に練り上げられた一連の計画は，当事者全員の思惑どおりに運んだようである。ただちに誠実誓約が実施され，亡き司教サッラの遺言宣誓で先頭に立ったのは，新しいウルジェイ司教アルマンゴルであった[9]。



図版 3　クンフレン副伯家系図

（下線を引いたのが歴代副伯）

C. Baraut, Els documents, dels anys 1010-1035, de l'arxiu capitular de la Seu d'Urgell, *Urgellia* IV（1981）, p. 19 より改変。

サッラがアルマンゴルの将来を慮（おもんぱか）ることは並々ならぬものがある。実際，司教職継承の妨げになりそうな問

題は入念に排除された。連続性を明確に意識し，またアルマンゴルを庇護下に置いていた以上，それは当然のことであったろう。ましてやアルマンゴルが甥にあたることを思えば，サッラのかかる尽力も何ら不思議ではない。

司教アルマンゴルの誕生に至るこのような経緯は，10-11 世紀カタルーニャの他の司教とも共通している。司教の任命は伯家・副伯家の専断事項であり，914-1075 年のウルジェイ司教 6 人のうち 5 人までがギフレ多毛伯の末裔であった。そもそも当時のナルボンヌ大司教区では，このバルセロナ伯王朝 comital dynasty の半ば伝説的な始祖の血を引いた息子，孫，曾孫が，司教叙任を左右している[10]。エルナ，バザルー，ビック，ジローナそしてナルボンヌ，いずれの司教と大司教も多毛伯の血を受け継いでいた。在地の伯家・副伯家の出身者が司教職を独占し，その地位を甥に譲ることも珍しくはない。もっともカタルーニャで支配的だったこの傾向は，実のところ 10-11 世紀ヨーロッパ全域に共通している。たとえば 963-1087 年のポワティエ Poitiers では，4 代にわたって，おじから甥に司教職が継承された[11]。ほぼ同時期のノルマンディー Normandie でも，同公家が 6 人のルーアン Rouen 大司教を輩出している。さらに西フランクと北スペインのキリスト教諸国・諸侯領へ目をやるなら，ロデーヴ Lodève，ニーム Nîmes，ル・マン Le Mans，ルーアン，パンプローナ Pamplona，オビエド Oviedo，プロヴァンス Provence ならびにアルビジョワ Albigeois 地方一帯で，おじが死を控えて甥に司教職を譲る例がみられるのである[12]。

11 世紀カタルーニャの社会と政治において，伯と司教は緊密に連携していた。両者ともに同じ社会層，家門に属していたことが，これを容易にしたことは疑いない。司教と伯は共同で裁判集会を主宰し，アンダルス Andalus〔訳注，中世イベリアにおけるイスラーム支配圏〕諸都市を襲撃し，平和会議を開いた。それは兄弟や従兄弟あるいはおじと甥の共同事業だったのである。アルマンゴルの同時代人でアルマンゴルよりも有名なウリバ Oliba は，サルダーニャ伯家出身のビック司教であった[13]。両者共通の甥であるギフレも，後にナルボンヌ大司教の地位に就いている。司教座は伯権力の外郭として機能した[14]。伯と司教はしばしば裁判集会を共同で主宰し[15]，伯が親族司教の司教座に寄進を惜しまない一方，司教も伯の軍事遠征に従うことを辞さなかった。アルマンゴルの前任者サッラは，後に建設現場で事故死した甥と異なり，戦場で命を落としている。すなわちカタルーニャ諸伯領の将兵がバルセロナ伯の下に行ったコルドバ遠征において，ウルジェイ伯やビック司教とともに戦死したのであった。

したがって伯権力と司教権力は，対立関係というよりも協力関係にあると認識されていた。両者の関係は，司教選出記録や「コンウェニエンティア convenientiae〔訳注，封建的約定〕」のような史料から正確にうかがい知れる。司教アルマンゴルが同名のウルジェイ伯アルマンゴル Ermengol と交わした複数の合意も，そうした「コンウェニエンティア」の一例であった[16]。10-11 世紀を通じ，伯・副伯の親族が司教職を独占した点で，カタルーニャとセプティマニアも他のヨーロッパ諸地域と変わらない。だが両地域の伯と司教の関係は，司教の行政的・裁判的権能に関するカロリング的理念が，伯家の政策とも親和性をもっていたことに独自性があった[17]。アルマンゴルは司教を公権力の代行者とみなすカロリング的政治思想と，カタルーニャ全土に法的正義や財産および裁判手続の理念を広めた西ゴート法の，相互に結びついた二種類の伝統を受け継いでいたのである。前者は 8-9 世紀フランク王国の中心部，後者は 7 世紀西ゴート王国の首都トレド Toledo と，それぞれ彫琢された環境こそ違えども，ある特定の時代・地域における需要を満たすため採用された伝統であったことに違いはない。つまり，どちらの伝統も 11 世紀初めの，いまだ荒削りなピレネー社会の現実に合わせて再構築されたものだったのである。したがって仮にアルマンゴル個人をフランク王権の忠実な代行者とみることはできなくても，公権力という枠組みの中で伯と司教が協力する，そのような関係を当然視する世界にアルマンゴルが生きていたという事実は否定できない。

アルマンゴルはまた，ウルジェイ伯の手による司教叙任を受け入れていた。のみならず在職中も，ときおりサルダーニャ伯ギフレに誓いを立て，伯の領域を侵さないことや伯が何者かに脅かされた際は援助することを約束している[18]。アルマンゴルの上位者にあたるナルボンヌ大司教ギフレは，同名のおじサルダーニャ伯ギフレの計らいにより，わずか 10 歳でこの買収された首都大司教職に就いた。後に今度は大司教ギフレが，ウルジェイ伯妃クンスタンサ Constança に 10 万「ソリドゥス solidi」を支払っているが，それは自分の兄弟ギリェム Guillem を同伯妃の手でウルジェイ司教職に据えるためであった。叙任自体は 1042 年に実現するものの[19]，その代価は高くついた。すなわち大司教ギフレは，ウルジェイ司教座買収のために教会の聖皿まで売り払ったとして，ナルボンヌ副伯により告発されてしまうのである。いずれにしても聖と俗，伯権力と司教権力の関係は，他のあらゆる地域と同様に緊密なものであった。たしかに 11 世紀後半になれば，この点を改革派から集中的に非難されることとなろう。とはいえアルマンゴルの在職期間を通じ，この種の関係がまったく疑問視されなかったこともまた，事実なのである[20]。もちろん教会人のなかには聖職売買（シモニア），同族主義，聖職者の妻帯，俗人叙任が蔓延するのをみて，いまや改革は焦眉の急であると危機感を募らせる者もあっ

ただろう。しかし改革派がこのような懸念や不安を抱き，またその影響力は 11 世紀後半に拡大の一途をたどるにせよ，旧来型の司教に真摯かつ功績ある人物が少なかったというわけではない。例をサッラとアルマンゴルに限っても，両者ともに勤勉な為政者であった。サッラは甥の司教教育に心血を注いだし，アルマンゴルも聖人伝で称賛されたのみならず，証書においても「いとも敬虔なる religiosissimus」司教と形容された[21]。さらにカタルーニャはじめ当時の地方社会においては，司教ソシアビリテ sociability（社会的結合）のネットワークが，いわば社会的・政治的な接着剤として重要な役割を果たしたことに特徴がある。政治権力が拡散して断片化を遂げながら，それでもなお高い安定性を維持したのはこのためであるが，かかるネットワークが血統と教育に支えられていたことも疑いない[22]。たしかに改革派は，やがてこの地域の状況に警鐘を鳴らすであろう。しかし同時に思慮深く勤勉かつ献身的な司教を数多く輩出したのも，改革派が非難したこの地域に他ならなかったのである。

図版 4

サルダーニャ伯ギフレ（左）に誠実誓約を立てるウルジェイ司教アルマンゴル（右）

F. Miquel Rosell (ed.), *Liber Feudorum Maior*, Barcelona 1945, II. 図版 7

司教と都市[23]

以上のように，アルマンゴルが教権と俗権を掌握するプロセスは当時として何ら珍しいものではなかった。そのアルマンゴルの在職期間は，ウルジェイ司教区にとっては，領域的にも経済的にも一大成長期となる。実際，サッラが司教職に就いた 981 年からアルマンゴルが没する 1035 年までの間に，ウルジェイ司教座所領は劇的に増加している。おじサッラはアンドラ Andorra 渓谷を中心に所領を拡げ，甥アルマンゴルの時代には，北方キリスト教圏の伯・司教が大きく南下してアンダルスの辺境を脅かしている。アルマンゴルにはサッラのようにコルドバ遠征に従軍した記録はないが，おじを鼓舞した膨張への意思とでもいうべき精神は受け継いでいた。たとえば 1017 年には他の貴顕とともにロダ司教座を設置しており[24]，また証書の記述によれば，1024 年にイスラーム拠点都市ギッソナ Guissona が奪回されて再キリスト教化されたのも司教アルマンゴルの功績であるという[25]。

攻撃的な隣人から教会所領を守るのも，アルマンゴルのような司教の責務であった。そこでは通常，軍事的な力量とともに法的手腕が問われる。たとえば 1024 年には，平素は親密なウルジェイ司教とウルジェイ伯が，相互の関係を揺るがすような所領争いを起こしている。伯が司教座は土地を横領していると訴えたのに対し，司教の法定代理人は，寄進文書や国王・教皇の特権文書を次々提示して伯を追い詰めた。3 年後にもアルマンゴルは司教座所領の防衛を余儀なくされている。それは親族相手の長く熾烈な係争であった。最終的に勝訴したとはいえ，幾重にも狡猾な策略をめぐらせた結果である。裁判記録の中で忍耐強いと称賛されているとおり[26]，アルマンゴルは何度か法の力で司教座所領を守り抜いた。自ら法廷で積極的に立ち回る様子は，聖人伝にも記されている。こうしてアルマンゴルは教会所領をねらう貪欲な者たちを制し，弁舌は巧みでも酷薄な法の専門家相手に三度まで勝訴することとなった。その結果，周囲から「戦いで頼るべき人 confisus in armis」とみなされるようになったという。他方でアルマンゴルは，ウルジェイ司教座聖堂と多数の小教会堂を再建するという，野心的な取り組みにも着手していた。現存するサン・ペラ Sant Pere 教会はその一例である。もっとも再建された司教座聖堂は，後に聖人となるもう一人のウルジェイ司教オト Ot の手で 1100 年ごろに改築される。抜群の組織力を発揮したアルマンゴルも，技術者としては必ずしも優秀ではなかった。バルの橋も崩落したが，彼がそれほど建築の才能に恵まれていなかったことは，この司教座聖堂をみても明らかである。史料を信じるなら，アルマンゴルが手がけた司教座聖堂は再建から 50 年を経ずして崩れかかっていたという（「おおかた壊れているように思われた pene fracta videbatur」）[27]。

アルマンゴルは司教区の経済においても積極的役割を果たした。都市ウルジェイの人口は，アルマンゴルの在職期間に増加している。司教と伯の共催によって複数の場所で年市が開かれるようになったのも，おそらくは 11 世紀のこの時期のことであった。史料に両替商や毛織物商人の所見が増え，ウルジェイ司教が造幣を開始す

るのも，やはりアルマンゴル時代かその直後のことである[28]。市場税の増収により，伯・司教・聖堂参事会は富裕化した。11 世紀は経済と人口の飛躍的成長期である[29]。しかしアルマンゴルの在職期間中，数え切れないほど多くの人びとが司教の助言を求めて押し寄せる一方で[30]，都市ウルジェイの国際化は不逞の輩をも招くことになった。『聖エルメンガウドゥス伝』によれば，「トゥルーズ Toulouse 出身の」少数の者たち —— 都市の市場に惹かれてウルジェイに来たことは疑いない —— は，司教聖人アルマンゴルの血数滴をもち去ろうとしたという。

以上のように，証書史料と考古学資料から得られる人物像には一定の特徴がみとめられる。すなわち，ウルジェイ司教アルマンゴルは教会堂を建設した。司教座市場の拡大に努め，抜け目なく立ち回って司教座の権益を守り抜き，同時にイスラーム領を征服して再キリスト教化した。証書の中のその姿は，小教区の組織者にして市場の差配人，流通税の徴収者にして「レコンキスタ」の立役者とでもいうべきものである。このように，いくつもの顔をもつアルマンゴルは，経歴の面でも施政の面でも 11 世紀司教の典型であった。法に明るくて商業に関心を寄せ，そのうえ忍耐強いというアルマンゴルの人柄は，聖人伝の記述によっても裏づけられる。1998 年，ピレネーの経済発展を目的として開かれる聖エルメンガウドゥスの年市に，産業発展プログラムから手作りチーズに至るまで 120 もの出展者が軒を連ねた。この光景を目にしたなら，聖人となった司教アルマンゴルは必ずや喜ぶに相違あるまい。

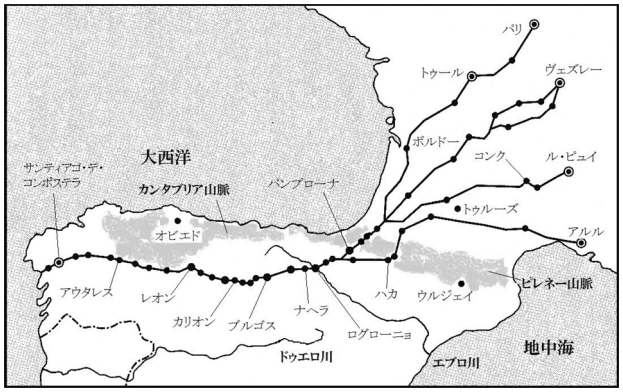
バルにかける橋

11 世紀の司教アルマンゴルについて，証書と聖人伝がいかに鮮やかな人物像を結ぶか，以上の考察からもある程度明らかになったように思われる。そこで以下では，聖人伝に記されているアルマンゴル最後の事業と，作業中の事故死という最初の問題に立ち返りたい。まずアルマンゴルが手がけたバルの橋について，それ自体で完結した史料はない。証書には，作業中に落下して死んだことを示唆する一節すら存在しないのである。したがって劇的な最期の場面は，読者の想像力を喚起したいと強く願った，聖人伝作者の思惑によるものと考えるべきだろう。畢竟（ひっきょう），聖人伝とは，ひとつひとつの事実にもとづいて歴史的事件を記録するというよりも，むしろ対象となる聖性 —— ある種の永遠の真実 —— を伝えたいという願望に突き動かされたジャンルである。主題と目的からすればアルマンゴル伝もその例に漏れず，感情に訴えて興味を引こうとしている可能性は否定できない。そうなるとバルの事故など，単なる伝説とすませたくもなる。

だがそれは思いとどまらねばならない。アルマンゴルの頭蓋は砕け，凍てつくセグラ川の水に洗われた —— こうした迫真の描写には，たしかに読み手の関心や共感を誘う意図が込められていよう。しかしこの最期の場面はまた，11 世紀の司教が果たした役割という，知的感興に満ちた議論の呼び水ともなるのである。仮にバルでの事故が聖人伝作者の虚構にすぎないとしても，それが司教「像 image」理解の有効な手がかりであることに変わりはないのだから。

聖人・聖女にとって，死は同時に誕生でもある。聖人が地上で死ねば，それは天上の法廷に昇ることを意味した。したがって現世における聖人最期の場面は，読者にとっても作者にとっても，ひとしく重大な関心事となる。作者は司教アルマンゴルの死に，いかにも聖人の最期といった文飾を施さない。たとえばアルマンゴルは，あらかじめ自分が死ぬことを信徒に告げることはなかった。そもそも死を予見してさえいない。初期中世の聖人伝が主題とした臨終の言葉はおろか，それなりの儀式的体裁をまとうこともないのである[31]。だがここまで慣例無視を重ねた作者ブレイは，それでもなお死の場面を特別視している。ブレイはアルマンゴル最後の事業に，この司教が 25 年の在職期間で信徒のため積み重ねた，事績すべての豊潤な隠喩（メタファー）をみてとった。「信徒のため，言葉によって天国への橋をかけた[32]」。バルの事故に関するこの表現は，隠喩としては，とりたてて独創的なものではない。だがここには，司教聖人とは橋をかけるものだという作者ブレイの聖人観があらわれている。この橋は旅・巡礼・商業の安全を守る物的な橋であると同時に，信徒の魂を防護するための霊的な橋でもあった。つまりブレイが伝えようとしたのは，物的な関心と霊的な関心が司教の人格において歩み寄る，まさにその有り様を伝えることだったのである。

橋の建設と維持は，司教が司教区に対して負う重大な経済的責務であった。またバルという土地自体，アルマンゴルの胸中で特別な位置を占めていたように思われる。少なくともバルの一部は両親の所領であり[33]，アルマンゴルにとっては故郷といえなくもなかった。そしてこのバルにアルマンゴルが橋をかけた —— 正確にはかけようとした —— ころ，カタルーニャの内外では橋の建設ラッシュが始まっていた。橋の数が増えるにつれ，その建設は信心行為であるという認識も広まっていく。カタルーニャでは 1040-80 年のあいだに，「橋のための ad pontes」寄進件数がめざましい勢いで増加している[34]。またアルマンゴルが死んで 2 年経ったころ，アルビ Albi では司教アメリウス Amelius が神の休戦を公布したが，その目的は「共同体の向上と全アルビの利便のために」タルン Tarn 川への架橋工事を呼びかけることであった[35]。また 1035 年にはジェロンヌ Gellone 修道院とアニアー



図版 5　サンティアゴ巡礼路

関哲行『スペイン巡礼史「地の果ての聖地」を辿る』
講談社 2006 年 114 頁より改変

ヌ Aniane 修道院の両院長が，現在も残る「悪魔の橋 pont du diable」建設を命じている。はるか北方ではフルク・ネッラ Fulk Nerra が，1007 年に 1 脚，1028 年にさらに 2 脚の橋を建設した。同じく 1028 年にブロワ Blois 伯オド Odo は，トゥール Tour 近郊における架橋工事への援助を布告した。「富にふさわしく神の嘉（よみ）するもの」をつくりたい，とは，伯が語った抱負である[36]。最後にウルジェイ西方の隣国，アラゴン Aragon の王ラミーロ Ramiro1 世が 1061 年に鷹揚な寄進を行ったのも，史料によれば「橋をかけて捕囚を買い戻すため」であった[37]。スペインにおける橋の建設は，サンティアゴ Santiago 巡礼にとって大きな恩恵となった。巡礼・信仰心・橋の密接な関係について，サイモン・バートン Simon Barton は次のように述べている。

> 国王・聖職者・俗人は，この間，競うようにして巡礼者のための施設を拡充した。道路の修繕，橋や教会の建設，宿泊施設と施療院設置の背景にあったのは，それを求める人びとの存在である。「命ある限り片時も信心行為を欠かさぬよう，ログローニョ Logroño からサンティアゴに至るまで，必要な場所すべてに橋をかけよと命じた」。オビエド司教ペラーヨ Pelayo がこのように述べて回想する人物は，レオン・カスティーリャ León-Castilla 王アルフォンソ Alfonso 6 世（在位 1065-1109 年）である。「コンポステラへの途上」，レオン山地の城塞アウタレス Autares を対象に，巡礼者の通行税を免除したのも同王であった。伯妃テレサ・オベキス Teresa Ovéquiz は，夫ゴメス・ディアス Gómez Díaz の事業を受け継ぎ，1077 年までにピスエルガ Pisuerga 川のカリオン Carrión 橋を完成させている。ドミンゴ Domingo というカスティーリャ貴族もまた，オハ Oja 川に橋をかけ，リオハ Rioja 地方ナヘラ Nájera や，遠くはレデシリャ Redecilla からブルゴス Burgos 東部までつづく巡礼路の敷設を請け負った。この貴族ドミンゴこそ，このような功績ゆえ後に列聖された，石畳（カルサダ）の道の聖ドミニクス Santo Domingo de Calzada に他ならない[38]。

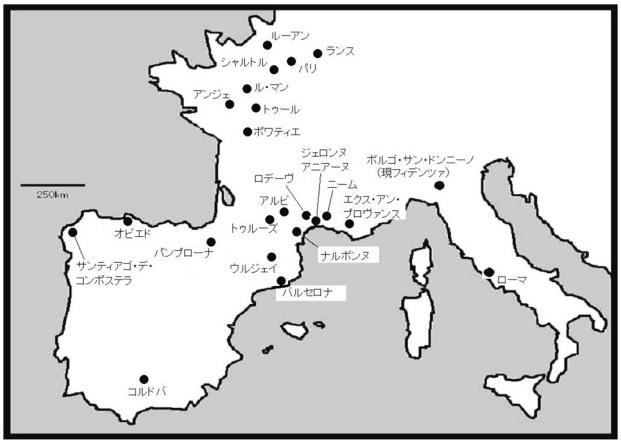
12 世紀に作成された『カリクストゥス写本 Codex Calixtinus』は，巡礼者から渡し賃をだまし取る船頭への注意を呼びかける一方，道路や橋を修繕した者には称賛の言葉を送っている[39]。13 世紀を迎えるころには，さらに世俗の法規でも，信仰と橋が明確に結びつけられるようになった。たとえばカスティーリャ王アルフォンソ 10 世が編纂させた『七部法典 Siete Partidas』は，橋の建設が信心行為であることを正式に認めている[40]。後期中世の教皇権も，橋の建設に貢献した者に贖宥と特権を与えた。教皇ベネディクトゥス Benedictus 13 世は，ウルジェイ西隣の伯領，リバゴルサ Ribagorça における架橋工事を奨励している[41]。もっともフルクをはじめとする伯やアニアーヌ修道院長のような例外もおり，またアルマンゴルほど直接的かつ肉体的に関与する司教は他にいなかったが，それでもなお橋の建設に責任を負ったのは往々にして司教であった。

アルマンゴルはバルの橋に力を注ぎ，信徒たちもこれを称賛した。橋が安全性の向上につながったからである。おかげでバルの住民は川の流れが錯綜する危険な山中を，つつがなく往来できるようになった。人間にとっても羊にとっても油断がならないとは，『聖エルメンガウドゥス伝』が記すバルの土地柄である[42]。複数河川の交錯地は危険なものだが，セグラ川がとりわけ猛威を振るったのもバル近辺であった。カタルーニャ史上もっとも愛された伯のひとり，バルナト・タリャフェッルが 1020 年にローヌ Rhône 川で溺死したことは，アルマンゴルもまず間違いなく知っていたであろう[43]。アンジェ Angers のベルナール Bernard も『聖女フィデスの書』において，岩がちなコンク Conques 周辺の往来がどれほど危険に満ちているか，同時代人ならではの見解を披歴している。奥深い峡谷で急流に行き当たり怖気をふるう，そのような旅人の様子を，ベルナールのこの書物から以下に抜粋してみよう。

> この地で深い地峡を刻みながら流れる川は，やがてひと筋の滝となって渓谷に注ぐ。轟音とともに水面を泡立てて注ぎ込むさまは，見る者の心胆を寒からしめずにはおかない…　これらの滝はあまりに凄まじい音，咆哮（ほうこう），濃霧に満ちているため，恐るべき地獄（ゲヘナ）とはこれに相違ないと，誰もがひとしく信じるほどである…　切り立つ崖に左右を挟まれて急流と化したこの川を，旅人は渡るのだ。か細い小枝でつくられた橋をつたい，彼らは滝を越えていく。身の毛もよだつ恐怖にふるえながら，足早に通りすぎるのである[44]。

つづいてベルナールは，驢馬の蹄（ひづめ）を橋に引っかけて事故

に遭った，不幸な巡礼者の話を紹介する。すっかり動転した驢馬は，地獄のような上述の川めがけて主人を蹴り落とした。集まってきた人びとの目にとまって救出されるまで，この不運な主人は，水に浸かったまま1時間以上もすごさなければならなかったという。人びとは巡礼者を救った聖女フィデスを讃えたというが，このような危険はカタルーニャに限られことではなかった。たとえばリシェ Richer は，勉学のため991年にランス Reims からシャルトル Chartres へと旅したときのことを記している。道すがら，ろくに補修されていない橋がいくつもあり，旅人は自分でこれを継ぎ合わせて渡らなければならなかった。付近の住民でさえ，このような野晒（のざら）しの橋を渡ることには恐れをなしたという[45]。さらに『聖ドニヌス伝』でも，この種の危険が印象的に記されている。記述によればドニヌスの聖遺物発見に歓喜した人びとが，大挙してパルマ Parma のスティロネ Stirone 川にかかる橋へと殺到した。あまりの重さに橋はたわみ，大群衆は水の中に投げ込まれる。なかには妊婦の姿もあった。それでも誰ひとり重傷を負わなかったのは，聖ドニヌス（サン・ドンニーノ）の奇蹟の賜物（たまもの）であるという。その様子を活写した12世紀ボルゴ・サン・ドンニーノ Borgo San Donnino〔訳注，現イタリア・フィデンツァ Fidenza 司教座〕聖堂のファサード彫刻装飾は，橋を渡る際のもうひとつの危険と，頑丈な橋がいかに大切であったかを雄弁に物語っている[46]。アルマンゴル自身，ローマ（2回）とサンティアゴに旅した経験から，こうした危険は身をもって知っていたに違いない。アルマンゴルがかけようとしたバルの石橋は，たとえ払拭できなかったにせよ，渡河に付きものの不安を和らげはしただろうからである。



図版6

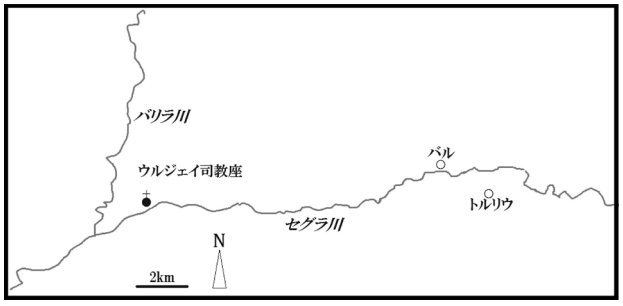
橋以外の面でも，この司教は水難から人びとを守った。アルマンゴルは水利奇蹟 hydraulic miracles に長けた聖人である。あるときセグラ川が氾濫して丘まで冠水させ，聖母教会〔訳注，サンタ・マリア・ダ・ラ・セウ・ドゥルジェイ教会＝ウルジェイ司教座聖堂〕を脅かしたことがあった。増水した川の流れを変える努力も失敗に終わり，ついにアルマンゴルが行動に出る。「何人か聖職者を従えてその場に赴くと，彼は大地に身を投げ，ひれ伏して祈った。川が流れを変え，聖母教会を避けて通るよう，キリストに懇願したのである。聖なる司教はいった。『おお汝，水よ，何故かかる涜聖（とくせい）のふるまいをなすのか。常の川筋に飽きて教会領を寸断しようとでもいうのか。神を冒涜する者よ，このような罪を犯すのは思いとどまるがいい。神の御名において要求する。わが祈りを聞き届けよ[47]』」。翌日，セグラ川はいつもの流路に戻った。聖人伝に「見るも驚くべく聞くも驚くべし Mirabile visu, mirabile auditu!」と記されているとおり，それが度を越して攻撃的な隣人と御しがたい河川のいずれであれ，アルマンゴルは潜在的な侵略者から教会領を守ったのである。

招かれざる水を立ち退かせただけではない。必要とあればアルマンゴルは水を招き寄せることもできた。『聖エルメンガウドゥス伝』には，司教が世を去ってから半年ほど後にみられた，次のような死後奇蹟が記載されている。そのころウルジェイ司教区を旱魃（かんばつ）が襲い，かつてアルマンゴルの在世中，司教座聖堂を脅かしたセグラ川にも劣らぬ被害をもたらした。水不足のために家畜の死骸が野を覆い，畑の作物も枯れ果てるという惨状である。共同体の面々が途方に暮れていると，アルマンゴルが何度か姿をあらわし，自分の遺体がしかるべき場所に埋葬されていないことを示唆した。聖職者と民衆がこれを受け，アルマンゴルの遺体を教会の一方から他方に移葬する。すると翌日は大雨となり，干上がっていた渓谷は潤いを取り戻したという。それから7年後，ウルジェイが再び旱魃に見舞われたときも，アルマンゴルは苦しむ住民を助けている。橋をかけ，洪水を防ぎ，待望の雨を降らせる ―― 以上すべてに共通するのは，予想しがたい雨量から暴れ川に至るまで，自然とその脅威を飼いならそうとする信徒に，司教アルマンゴルが救いの手を差しのべていることである[48]。聖人・共同体・自然界のこの三者関係は，ダイナミックではあるが，とりたてて驚くべきものではない。なぜならセグラ川はときに氾濫して住民を脅かしもしたが，一方では囲壁をもたない都市ウルジェイを，何世紀にもわたって外敵から守りつづけたからである[49]。

最後に，橋をかけることは，人間社会と自然界の関係を再編することでもあった[50]。すなわち人びとは脅威をコントロールすることで，他の共同体の儀礼行為や経済活動に参加できるようになったのである。そこからすればアルマンゴル最期の場面は，前後の脈絡を欠いた，徒（いたずら）に耳目をそばだてるためだけの挿話であったとは考えられない。山あいの渓谷で自然の脅威に晒されながら，それでもなお経済成長に与りたいと願っていた11世紀初めの住民にとって，橋の建設に力を尽くす司教ほど望まし

い指導者はいなかった。「全ウルジェイ民衆の守護聖人は，先に述べた都市民のみならず，農民の福利にも心を砕いていた Patronus totius Urgellensis populi dictis et factis, non tantum urbanis, sed et curabat prodesse rusticis」。聖人伝はこのように述べて，アルマンゴルが都市の商人と周囲から隔絶した谷間の農民の，いずれにとってもひとしく守護聖人であったことを物語る。アルマンゴルの死に関する記述も，共同体のために司教がどれほど危険を冒したか，いかにして実務と聖務を結びつけて現世と来世のあいだに橋をかけたか，そうしたことを銘記して賛美するうえで，もっとも効果的な手法を選んだ結果なのである[51]。幸いなるウルジェイ人なら誰であれ，こうした守護聖人に恵まれたことを喜ぶべきである ――『聖エルメンガウドゥス伝』がこのように主張するのも無理はない[52]。

なおアルマンゴル没後，橋の建設がいかなる運命をたどったか，聖人伝は黙して語らない。同司教が深く関与していた以上，事業の失敗が暗示されていると解釈すべきだろう。それでも，セグラ架橋は 11 世紀バル住民の悲願でありつづけた。たとえば 1040 年代の遺言状に，バルの橋に言及したものが 2 つある。セグラ川にかけるこの橋のため，サニオフレト Seniofred なる司祭は葡萄酒 1 クイナル quinal を遺贈し，同年ギタルト Guitard なる「司祭 levita」もこれに倣った[53]。もっともこの橋が，アルマンゴルの手がけた橋と同じものであったかどうか定かではない。いずれにせよ 1070 年代を迎えるころには，セグラ川を渡る交通に新たな動きが求められるようになっていた。1076 年の平和の合意は，誠意をもって努力しながらも決して手際がよかったとはいえない司教〔アルマンゴル〕の死後なお，人びとが依然として橋を希求していたことを伝えている。この合意文書の中で，バルとトルリウ Toloriu（セグラ川を挟んでバルと向かい合う集落）の住民は，まずはじめにウルジェイ伯とサルダーニャ伯の紛争に巻き込まれはしまいかとの懸念を表明する。事実，彼らは不安に駆られていた。「近隣に住むわれわれとしては，この騒乱に呑み込まれるわけにはいかず，またほとんど根こそぎ家財を奪われるようなことがあってもならない。だからわれわれとわれわれの子孫すべてが，あらゆる恐怖から安全かつ自由になれるよう，できる限りの準備をしよう」。人びとは感謝の念を示しながら，以下の条件に賛同した。「われわれとわれわれの子どもたちは，セグラ川に臨むバルに前述の橋をかけ，両境界を結ぶ前述の道を均(なら)そう。この世に人のある限り，この道を通って橋を渡りたいと望むすべての人間が，なんら阻まれることなくまっすぐ進んでいけるように」[54]。こうして 1076 年，40 年前にアルマンゴルが命を賭した橋は，住民自身の手でバルに完成した。ところが地上に人の暮らす限り存続する橋を，と願った住民の思いが果たされることはなかった。バルの橋は 1985 年に崩れ落ちたのである。



図版 7

注

1．［訳注］当時のカタルーニャにおける教会行政区について，概略を記しておく。古代よりタラゴナ Tarragona 大司教座の下に編成されていた北東イベリアの諸司教区は，8-9 世紀のイスラームおよびフランクの征服によって解体した。両宗教勢力圏の境界域に位置するタラゴナは荒廃し，繁栄を誇ったかつての古代都市とともに同大司教座は失われる。後にカタルーニャと呼ばれるこの地方の教会は，フランク王権によってピレネーの彼方，南仏ナルボンヌ Narbonne 大司教座の管轄下に組み込まれた。こうして 12 世紀前半にバルセロナ伯がタラゴナを征服するまで，約 400 年にわたってカタルーニャの諸司教座はナルボンヌ大司教区に属することとなる。

王権による再編は個々の司教座にも及んだ。古代の司教座アガラ Egara とアンプリアス Empúries が廃止され，代わりにイスラーム占領期に消滅していたエルナ Elna・ジローナ Girona・バルセロナの 3 つの司教座が再建される。9 世紀末には，カタルーニャ「建国の父」ギフレ多毛伯 Guifré el Pelós がビック Vic 司教座を復興した。やがて 11 世紀前半にロダ Roda 司教座が新設されたことは，本文でも述べられているとおりである。また一時的にであるが，同じ 11 世紀前半には，本文にも登場するバザルー Besalù 伯バルナト・タリャフェッル Bernat Tallaferro の肝入りでバザルー司教座が設置された。

こうしたなかにあってイスラーム征服後もっとも早い時期に再建され，広くピレネー地方カタルーニャ圏を統轄したのがウルジェイ司教座である。ちなみに養子説 adopcionisme（イエスは神に養子として受け入れられた人間であるとし，キリストの神性を否定する説。註 23 も参照）に共鳴して異端宣告を受けたことで有名なフェリクス Félix は，フランク征服に先立つこと 7 年前に選出されていた同司教（在職期間 781-89 年）であった。以上の経緯を経て，司教アルマンゴル時代（1010-35 年）のカタルーニャには，合計 7 つの司教区が並び立つ状況となっていた。

2．“Coepit ipse manibus propriis operando pontem construere.” *Vita S. Ermengaudi*, in *Acta Sanctorum Novembris*, Vol. II, Pt. I (Brussels 1894), P. 84, col. 1, par. 4. *Bibliotheca Hagiographica Latina*, 2609. この『聖エルメンガウドゥス伝』は，成立年代の確定がむずかしい史料である。ニクラウ・ドゥルベ Nicolau d’Olwer は，11 世紀半ばのウルジェイ司教座に「学者 scolasticus」ブレイなる聖堂参事会員が存在したことを根拠として 1040 年代成立説を唱えたが（La litérature latine au XI^{e} siècle, *Catalogne a l’époque romane* [Paris 1932], pp. 216-217），『エルメンガウドゥス伝』の成立が比較的早かったと思われる理由は他にもある。すなわち聖エルメンガウドゥス崇敬はアルマンゴル本人の死後急速に発展しており，崇敬のプロモートには聖人伝が

不可欠だったと推測されるからである。さらにいえば，アルマンゴル伝の関心は証書史料のそれと符合している。

3．Cebrià Baraut（ed.），Els documents dels segles IX-XI conservants a l'Arxiu Capitular de la Seu d'Urgell，*Urgellia* 2（1979），7-145; 3（1980），7-166; 4（1981），7-186; 5（1982），7-158; 6（1983），7-244; 7（1984-85），7-220; 8（1986-87），7-150. 司教アルマンゴル在職期間の文書は *Urgellia* 4（1981）に収録されている。

4．Baraut，*op. cit.*，Nos. 491，491bis。

5．Mathias Delcor，Ermengol évêque d'Urgell et son oeuvre（1010-1035）de l'histoire à l'hagiographie，*Cahiers de Saint-Michel de Cuxa*（1989），pp. 169，174.

6．［訳注］フランク王国の国制では，地方行政の長である伯を，都市に置かれた副伯と農村部のウィカリウスが補佐することになっていた。もっともすべての伯領が固有の伯と副伯・ウィカリウスを備えていたわけではない。たとえばカタルーニャでもウゾナ Osona 伯というものは存在せず，同伯領は歴代バルセロナ伯の固有の支配領域に属しながら，実態としてはビック司教の統治に服した。

アルマンゴルとゆかりの深いクンフレン伯領も，10 世紀半ばから独自の政治・裁判領域として史料に登場するものの，当初はルサリョ Roselló 伯ついでサルダーニャ Cerdanya 伯の支配下にあった。このサルダーニャ伯の下で実効支配に当たったのが，司教アルマンゴルを輩出したクンフレン副伯家である。11 世紀末まで史料所見が遺されているこの家系の始祖は，アルマンゴルから遡ること三代前，9 世紀のアイグアテビア Aiguatebia 城主で初代副伯になったウニフレト Unifred 1 世であった。ちなみにアシャラダ Eixalada 修道院やクシャ Cuixà 修道院など，カタルーニャ教会史のみならずロマネスクの美術史や建築史を彩る名刹の多くは，このクンフレン伯領に所在する。

7．*Ibid.*，p. 162.

8．Baraut，*op. cit.*，No. 276.

9．*Ibid.*，No. 314.

10. Peter Linehan, The Church and Feudalism in the Spanish Kingdoms in the Eleventh and Twelfth Centuries, *Chiesa e mondo feudale nei secoli x-xii: Miscellanea del Centro di Studi Medioevali* 14（Milan 1995），305-306. ここでリネハンが取り上げるのはリチャード・サザーン著『中世の形成 The Making of the Middle Ages』〔訳注，（森岡敬一郎・池上忠弘訳）みすず書房 1973 年〕である。

11. Marcel Garaud, *Les Châtelains de Poitou et l'avènement du régime féodal, XI^e^ et XII^e^ siècles*（Poitiers 1967），p. 65.

12. Bernard Guillemain, Les Origines des évêques en France aux XI et XII siècles, *Miscellanea del Centro di Studi Medioevali* 7（1974），380-381; Jean Gaudemet, Recherches sur l'épiscopat médiéval en France, *Proceedings of the Second International Congress of Medieval Canon Law, Boston College, 12-16 August 1963*, edd. Stephan Kuttner and J. Joseph Ryan（"Monumenta Iuris Canonici", Series C: Subsidia, Vol.1［Vatican City 1965］），p. 142; Jean-Pierre Poly, Martin Aurell, and Dominique Iogna-Plat, La Provence, in *Les sociétés méridionales aux alentours de l'an mil: répertoire des sources et documents commentés*, ed. Michel Zimmermann（Paris 1992），pp. 340-341; Jean-Louis Biget, L'épiscopat du Rouergue et de l'Albigeois（X^e^-XI^e^ siècles）in *Catalunya i França meridional, a l'entorn de l'any mil*, edd. Xavier Barral i Altet *et al.*（Barcelona 1991），pp. 181-199; Pierre Bouet and Monique Dosdat, Les évêques normands de 985 à 1150, in *Les évêques normands du XI^e^ siècles*, edd. Pierre Bouet and François Nevers（Caen 1995），p. 19; R. Kaiser, Les évêques neustriens du X^e^ siècle dans l'exercise de leur pouvoir temporal d'après l'historiographie médiéval, in *Pays de Loire et Aquitaine de Robert le Fort aux Premier Capétiens*, Actes du colloque scientifique international tenu à Angers en septembre 1987, edd. Olivier Guillot and Robert Favereau（Poitiers 1997），p. 125.

13.［訳注］971 年ごろ-1046 年（司教在職期間 1018-46 年）。クシャ・リポイ Ripoll 修道院長としてピレネー南北にまたがる 40 近い修道院の改革運動を指導したのち，ビック司教の地位に就いた。ヨーロッパ史上初めて「神の休戦 Treuga Dei」を実施したことでも名高い。前出のサルダーニャ伯ギフレ，後に登場するバザルー伯バルナト・タリャフェッルの兄弟でもある。

14.［訳注］キリスト教会においては，司教（語源的には「監督者」を意味）は使徒たちの後継者とみなされ，古代よりこの権威の座が連綿と引き継がれていた。命令・裁判・教育の 3 つの権能をもつ司教は，本来，教区（司教区）にあって信者の集いを主宰し，儀式を執り行って彼らを教導する宗教的指導者であるが，後期古代から初期中世にかけ，その大半を地方の名門家系の出身者が占めていくとともに，教会の組織と財政基盤を利用しながら宗教的領域に留まらない統治者へと変貌していった。

9 世紀のカール大帝が広大なその帝国に比して脆弱すぎる行政機関を補うため，教会の組織と人材を利用し，とくに伯と司教を共同統治者としてその中心に据えたことはよく知られている。本文中で「公権力という枠組みの中で伯と司教が協力する」体制，「カロリング的政治思想」と呼ばれているのもこれである。なお英語原文における「司教座 see」は，本来，権威の座ないし教会行政上の拠点を意味する言葉であるが，文中でそれが有力貴族家門による取得ないし買収の対象を指す場合，子弟が得るポストであることを明示するために「司教職」と訳し分けた。

15. 司教アルマンゴルが伯スニェ Sunyer と共同主宰した裁判集会については，Paris, Bibliothèque Nationale, Coll. Moreau 18, fols. 160-161 を参照。

16. Pierre Bonnassie, *La Catalogne du milieu du X^e^ à la fin du XI^e^ siècle: croissance et mutations d'une société*,（2 vols.; Toulouse 1975-76），I, 568. 司教アルマンゴルがサルダーニャ伯ギフレに立てた誠実誓約も参照。Michel Zimmeman, La Catalogne, in *Les sociétés méridionales*, p. 172.「コンウェニエンティア」については，Adam J. Kosto, The *Convenientia* in the Early Middle Ages, *Medieval Studies* 60（1998），1-54.

17. Paul Freedman, Le pouvoir épiscopal en Catalogne au X siècle, in *Catalunya i França meridional*, pp. 174-177; Antoni Abelló, L'Aristocràcia en els comtats d'Urgell i de Cerdanya（s. IX-X），*Actas del Congreso Internacional 'Historia de los Pireneos', Cervera 1988*（Madrid 1991），II, 65-84; Elisabeth Magnou-Nortier, *La société laïque et l'église dans la province ecclésiastique de Narbonne*,（Toulouse 1974），pp. 344-348.

18. *Liber Feudorum Maior*, ed. F. Miquel Rosell（Barcelona 1945），II, doc. 583.

19. Magnou-Nortier, *op. cit.*, pp. 645-646.

20. *Ibid.*, pp. 447-474.

21. Baraut, *op. cit.*, No. 390.

22. 以下を参照。Jeffrey A. Bowman, Councils, Mills, and Memory: The Early Development of the Peace of God in Catalonia, *Early Medieval Europe* 8（1999），99-130.

23.［訳注］都市ウルジェイについては，ウルジェイとバルセロナを主要対象に初期中世の都市形成から後期中世の都市社会まで幅広い研究を行っている，現地カタルーニャ学界の都市史の大家カルマ・バッリャ Carme Batlle の一連の研究がある。本誌の性質上，やや詳しく紹介しておく。C. Batlle, Evolución de una ciudad

catalana: La Seu d'Urgell en la edad media, in *Homenaje a Don José María Lacarra de Miguel en su jubilación del profesorado: estudios medievales*, Zaragoza 1977, pp. 175-190; Els orígens medievales i l'evolució urbana de la Seu d'Urgell, *Urgellia* 2（1979）, pp. 147-167; Un aspecte de la historia dels Pirineus: els elements de la poblacio de la Seu d'Urgell, in *Conflent, Vallespir et montagnes catalanes: actes du Li^e Congrès de la Fédération histirique du Languedoc méditerranéen et du Rusillon organisé à Prades et Villefranche-de-Conflent, les 10 et 11 juin 1978*, Montpellier 1980, pp. 93-102; *Els orígens medievales de la Seu d'Urgell*, Barcelona 1979; La ciutat de la Seu d'Urgell i altres poblacion de la comarca, *Catalunya Romanica*, VI(1992), pp. 88-97.

本稿の主要舞台はピレネー山岳地帯のカタルーニャ側，ウルジェイ司教区である。ピレネー山中でも特に広いこの盆地は，中世から現在に至るまで，一貫してラ・セウ・ドゥルジェイ La Seu d'Urgell を中心的定住地としてきた（文字通り「ウルジェイ司教座」という意味である）。「ウルジェイ」の名はローマ時代の呼称「オルギア Orgia」あるいは「オルゲッリア Orgellia」に由来し，古くは山岳地の先住民が話していたバスク語に起源するという。だが「キウィタス civitas」（ローマ期の首邑都市）オルゲッリアが，そのまま今日のラ・セウ・ドゥルジェイに連続しているわけではない。

古来この付近一帯はピレネーを縦横に走る陸上交通路の結節点であった。東のサルダーニャと西のリェイダ Lleida（司教アルマンゴルの時代はイスラームの有力都市）を結び，南はバルセロナから北は南仏諸地域まで伸びる幾筋もの道路が，この盆地で交わり合った。ピレネーの山中といっても，決して周囲から隔絶した陸の孤島でなかったことは，本文にもあるトゥルーズ人の記述から明らかである 。実際 12-13 世紀の南仏ラングドックおよびカタルーニャで異端カタリ派が蔓延したのも，トランス・ピレネー羊毛産業（移動放牧と毛織物関連の商業・手工業）の発展が背景にあった。山脈を越えた南側，カタルーニャにおけるカタリ派最初の拠点はウルジェイ司教区である。

いずれにせよ交通の要衝であったこの地域で，最初の中心的定住地が形成された場所はラ・セウ・ドゥルジェイではない。同所から西に約 1.5 キロメートル離れた，バリラ Valira 川岸の小高い丘である。古代の都市的集落キウィタスはこの丘陵に建設され，周辺領域ローマ化の拠点となった。これが現在のカステイシウタト Castellciutat で，伝説によれば聖ヤコブ（サンティアゴ）の弟子といわれる聖ユストゥス Justus（初代ウルジェイ司教ジュスト Just）が司教座を創設し，福音伝道の拠点としたのも丘上都市オルゲッリアであった。

ところが 8-9 世紀，南北から相次いでこの地に侵入したイスラーム，およびフランクの征服で状況は一変する。オルゲッリアがイスラーム支配に服した期間は比較的短かったが，その立地ゆえ以後もしばしば略奪遠征の標的にされ，古代以来の都市的集落は次第に衰えていった。教会史上に有名なウルジェイ司教フェリクス（818 年没）の存在が，この退潮に拍車をかける。フェリクスはローマの教皇権に対抗するトレド大司教エリパンド Elipando に共鳴し，ローマ教会から異端と断罪されたその主張（養子説）を支持したため，「キリスト教帝国」の危機を感知したフランク王権が直接介入に乗り出したのである。司教フェリクスは教皇レオ Leo 3 世によって罷免され，カロリング教会政策の立役者というべきアルクィンとアニアーヌ修道院長ベネディクトゥスの両名が，この地における養子説異端と旧西ゴート教会の伝統一掃を指揮した。注目すべきは，都市的空間の再編が伴ったことである。すなわちこの過程で司教座はバリラ川を越えて東に移動し，やがて「ウルジェイのウィクス Vicus Urgelli」と呼ばれる新たな中心的定住地がセグラ川北岸に形成された。司教座の移転により，古代のキウィタスから郭外地ウィクスへと中心核が移動する現象は，同じカタルーニャ都市ビックにも共通する（地名ビックのラテン語表記はまさしく「ウィクス」）。ただ異端のキウィタスに正統信仰のウィクスが取って代わるという，聖俗が複雑に絡まり合った一種の政治文化的な形成プロセスに，中世都市ウルジェイの独自性がみてとれる。

キウィタスには伯の城塞が残ったものの，司教座ウィクスの発展と反比例するようにして衰え，ついには「キウィタス・フラクタ civitas fracta（崩れた都市あるいは衰えた都市）」とまで形容されるに至った。こうして司教アルマンゴルの時代（11 世紀前半）には，西のカステイシウタトと東のラ・セウ・ドゥルジェイという，バリラ川を挟んで向かい合う都市的景観の原型ができあがった。よって正確を期するなら，中世以降この地域の中心都市は「ラ・セウ・ドゥルジェイ」であったというべきだろう。しかし煩瑣を嫌ってか，現地カタルーニャでも「セウ」あるいは「ウルジェイ」と省略することが珍しくない。実際，バウマン博士の原文でも単に「ウルジェイ」とのみ表記されていることから，以下の訳文では「都市ウルジェイ」の地名で統一した。

なお司教アルマンゴルの下で本格的成長を開始した中世都市ウルジェイは，その後 12 世紀後半に「悪しき慣習 mals usos」の免除を得て法的に「自由」となり，13 世紀後半から 14 世紀前半のマリョルカ王国 Regne de Mallorca 時代に最盛期を迎える。ちなみに都市ウルジェイにおける年市 feria の所見（11 世紀前半）は，カタルーニャはもとよりイベリア全域でも最も古い。

24. Magnou-Nortier, *op. cit.*, pp. 336-337.
25. Domènec Sangés (ed.), Recull de documents del segle XI referents a Guissona i la seva Plana, *Urgellia* 3（1980）, 195-305; Flocel Sabaté i Curull, Organització administrativa i teritorial del comtat d'Urgell, *El Comtat d'Urgell*（Lleida 1995）, p. 22.
26. ...quem iam dictus episcopus, bonitate repletus, pro hoc ira non elevatus mutavit ei placitum usque in crastinum..., Baraut, *op. cit.*, No. 416. なお No. 390 も参照。
27. Mathias Delcor, Les églises préromanes es romanes de Cerdagne, *Cahiers de Saint-Michel de Cuxa*, 11（1980）, 157.
28. Anna M. Balaguer, Les primeres amonedacions episcopals i comtals d'Urgell, *Acta numismatica*, 21-23（1991-1993）, 395-406; Carme Battle i Gallart, *Els origens medievales de la Seu d'Urgell*,（Barcelona 1979）, pp. 17, 31; Baraut, *op. cit.*, No. 899 も参照。
29. Carme Battle i Gallart, *La Seu d'Urgell: La ciutat i els seus habitants*,（Barcelona 1985）, p. 25.
30. "Ad eum quasi ad fontem vivum Urgellensis populi caterva, sitiens salutis consilia, unanimiter concurrebat, et quae conveniebat et optabat, promerebatur". *Vita s. Ermengaudi*, p. 84, col. 1, par. 3.
31. Pierre Boglioni, La scène de la mort dans les première hagiographies latines, in *Le sentiment de la mort au Moyen Age: Etudes presentés au cinquième colloque de L'Institut d'études médiévales à l'Univertité de Montréal*, ed. S. Sutto（Montreal 1979）, p. 190. ゲオルク・シャイベルライターによれば，「突然の死は神が嘉していないことの証しとされた」というが，アルマンゴルはその例外であろう。Georg Scheilbelreiter, The Death of the Bishop in the Early Middle Ages, in *The End of Strife*, ed. David Loades（Edinburgh 1984）, p. 39.
32. 注 49 以下を参照。
33. Barut, *op. cit.*, No .282.
34. Bonnassie, *op. cit.*, pp. 839, 953-954.

35. アルビにおける司教の関与については以下を参照。Biget, *op. cit.*, p. 193.
36. “Pontem fieri super Tarinum, in alodio beati Salvii, ad communem villae meliorationem, et totius Albereis utilitatem”. *Gallica Christiana*, Vol. I (Paris 1915), ad instrumenta, no. 6, p. 4; Nicholas Brooks, Medieval Bridges: A Window into Changing Conceptions of State Power, *Haskins Society Journal*, 7 (1995), 27; Marjorie N. Boyer, *Medieval French Bridges: A History*, (Cambridge, Massachusetts 1976), p. 164.
37. “...et de alios meos barones sedeat totum datum et partitum per mea anima, per monasterios et in labores de pontes facere, et per captivos redimere, et in castellos de fronteras de maurous qui sunt per fare unde prodesit de christianis totum...” Arteta, *Cartulario de la Sant Juan de la Peña* (Valencia 1963), II, 201, No. 159. 以下も参照。Maria Teresa Iranzo Muñio, Puentes medievales en la provincia de Huesca: aspectos económicos y sociales, *Aragón en la Edad Media*, 5 (1983), 45-68.
38. Simon Barton, Patrons, Pilgrim’s, and the Cult of Saints in the Medieval Kingdom of León, in *Pilgrimage Explored*, ed. J. Stopford (York 1999), pp. 73-74.
39. William Melczer, *The Pilgrim’s Guide to Santiago*, (New York 1993), p. 88.
40. Carlos Calderon, Los puentes en la Castilla bajomedieval, *Cuadernos de historia de España* 71 (1989), 29-110, at 46. 以下も参照。F. Javier Vilalba Ruiz de Toledo, Notas acerca del estudio de las vías de comunicación en la España cristiana durante los siglos X y XI, *Estudios de historia medieval en homenaje a Luis Suárez Fernández*, (Valladolid 1991), pp. 542-543. 以下にいくつかイタリアの例がある。Thomas Szabó, Costruzioni di ponti e di strade in Italia fra il IX e il XIV secolo. La transformazione delle strutture organizzative, *Ars et ratio. Dalla torre di Babele al ponte di Rialto*, edd. Jean-Claude Maire-Vigueur and Agostino Paravicini Bagliani, (Palermo 1990), pp. 73-91.
41. J. Rius Serra, Benedicto XIII y la construcción de puentes, *Analecta Sacra Tarraconensia* 7 (1931), 357-361.
42. “Est autem in Urgellensis Cerdaniensisque parrochiae confinibus locus quidam, Barensis nuncupatus, inter montium latera angustissimus, per quem tunc temporis nisi per scopulos et per praerupta hominum aderat incessus, pecorum vero nallatenus reperiebatur transitus.” *Vita s. Ermengaudi.*
43.［訳注］在位 988-1020 年，サルダーニャ伯ギフレとビック司教ウリバの兄弟で，この時代の複雑な伯家間および聖俗関係を象徴する人物のひとり。12 世紀半ばに成立した有名な家系書『バルセロナ諸伯の事績録 Gesta Comitum Barchinonensium』によれば，「戦場においていとも苛烈かつ頑強な姿を示した armis acerrimus atque fortissimus extitit」といい，心身ともに剛健であったことから「鉄人伯（タリャフェッル）」の異名をとった。それと同時に油断ならない野心家でもあり，たとえばバルセロナ伯主導のコルドバ遠征に従軍する一方で，アンプリアス伯とルサリョ伯の兄弟間紛争を煽って同伯家の分裂を画策した。倫理的退廃を理由にサン・ジュアン・ダ・ラス・アバデサス San Joan de les Abadesses 修道院の修道女たちを追放し，改革派を標榜してローマ教皇権に接近したのも，本拠地バザルーに司教座を新設して領域統合を進める方策であったとされる。もっともここに書かれている不慮の事故死のため，1017 年に新設されたバザルー司教座はわずか 3 年で潰えた。なお南フランスでのこの水難は，息子をプロヴァンス伯の娘と娶せるべく自ら話し合いに赴く途上のことであったという。整った顔立ちに高貴な風貌，長身，物腰柔らかだが雄弁な語り口，敵への勝利において傑出し，悪しき者を震撼させる一方，よき人に対しては温厚，謙虚，憐れみ深い貧者の父であり，正義をなすに峻厳，教会を建てて修道士を愛し，修道士が尊ぶ父にして敬うべき主君であったというクシャ・リポイ修道士の弔辞に，この人物のカリスマ性がうかがわれる。
44. Bernard of Angers, *The Book of Sainte Foy*, ed. and tr. Pamela Sheingorn, (Philadelphia 1995), pp. 145-146.
45. Boyer, *op. cit.*, p. 81.
46. A.K.Porter, *Lombard Architecture*, (New Haven, Connecticut 1917), II, 166-169. ならびに Atlas, plate 30, no. 5. また以下もみよ。Boyer, *op. cit.*, p. 5.
47. “Et quoniam alio nullo poterat aquam delivare labore, ilico quibusdam accersitis ex clero, se in oratione dedit humi prostratus, deprecatus Christum, ut a praesidiis virginis matris fluminis averteret impetum. Nec cessat humo tenus artubus diffusus, vultu prostrato conquiescens publico flexu sanctus antistes sibi sistere precibus, atque pectus sanctum tundere, et rigando genas madescere lacrimis, ecclesiae fundos［*ed.* fundens］ut Dominus exsiccaret ab undis. Cur, inquit, episcopus sanctus, o latex, audes hoc agere sacrilegium, ut servando tui cursus taedium, diluas ecclesiae praedium? Desine, eia, ab hoc crimine, temerator, divino te nomine contestor, meis monitis deprecor.” *Vita s. Ermengaudi*, p. 84, col. 1, par. 3.
48. 同時代のラングドックにおける河岸補強工事については以下を参照。Arline Durant, *Les paysages médiévaux du Languedoc* (*X-XII siècles*), (Toulouse 1998), pp. 251-253.
49. Batlle, *op. cit.*, p. 25.
50. Calderon, *op. cit.*, 46.
51. “Non immerito igitur pontificis nomine Dei cultor fungebatur, quia si animarum saluti pontem parabat, quo inter in caelum dirigeretur, corporum etiam substantiae subiciens, pontem iter facientibus componere nitebatur.” “Cernens autem humani generis conditor suum pastorem bonum opus excercere, ore pontem ad aetherea, opere in tellure commissis sibi ovibus praeparare, nolens illum mundano diutius conteri labore...” Vita s. Ermengaudi, p. 84, col. 1 and 2, par. 4.
52. “Quam felix Urgellensis patriae locus, ubi electro purior, auro carior, talis ac tantus creditur inesse thesaurus. Gaudeat Urgellus, gaudeat Urgellensis populus, laetetur clerus, tanti ponderis sibi creditum meruisse talentum.” *Vita s. Ermengaudi*, p. 83, col. 1, par. 1.
53. Baraut, *op. cit.*, Vol. 5, pp. 104-105; Vol. 6, pp. 87-88; Delcor, *op. cit.*, p. 173.
54. J.M.Font Rius, *Orígenes del régimen municipal en Cataluña*, (Madrid 1946), doc. 1, pp. 468-469. 英訳は以下。*The Usatges of Barcelona: The Fundamental Law of Catalonia*, trans. Donald Kagay, (Philadelphia 1994), appendix. また以下も参照。Gener Gonzalvo i Bou, El Comtat d’Urgell i la Pau i Treva, *El Comtat d’Urgell*, (Lleida 1995), p. 74.